

開

※ 字数制限のある問題は、テン・マル・カッコなどの記号も一字として答えなさい。
※ 下書き用紙(A6)は、提出しません。

一

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。なお、《 》の中は直前の語句の説明です。

小学校も卒おえることができずに、小さい時から工場通いをし続けてきた兄が、工場の帰りにカバンを買ってきてくれた。A社の給仕《会社などで雑用をする人》に出ている二番目の兄がそれへ名前を書いてくれる。

そうして明治何年かの四月一日、母はいそいそした私の手を引いて小学校の門をくぐった。私はきつと、次兄じけいの着古した紺こんがすりの縫ぬい直したのを着、新しいごわごわの袴はかまと、新しいカバンと新しいびかびかする帽子ぼうしをかぶって、しかし、かたわらの者から見た私の姿は、袴にはかれ、帽子にかぶられ、カバンに下げられていたに違ちがいない。①きつとその日はよい天気であつたろう。

父は体が弱かった。八、九年も、同じ印刷所の校正係《印刷の誤りを直す仕事》をつとめていた。その間に、他の仲間たちはどんどんよい位置を占め、社も発展していった。しかし父はいつもガラス戸のはまった寒い、暑い校正室の中で、赤い筆を持っていた。

——私はよくそこへ、夜業のある時などにお弁当を届けに行つた。蚊かをつぶした新聞紙のようになった、校正刷りがたくさんあつて、印刷所特有の、鉛なまりや、紙や、インキの湿しめったにおいが、薄暗うすくなった狭せまい室の間にただよっていた。

明かり取りのすりガラスが鉛色に明るく、夕暮れのもつ蒼あおさに透すいて、やせた父の頭の上に四角くあつた。

「とうさん、ほんの一寸ちよつとしか箸はしをつけなかったんだが、お前たべないか。」

ある時(あるいは二、三度ばかり)父はそう言つて、昼に弁当屋からとつた弁当の残りを差し出したことがあつた。平生私は、父をけちんぼだと思つていた。父がけちんぼなのを考えると悲しくなることもあつた。薄暗くなつた室の内で父の視線と私の顔があつた時、私はそれをよけて不機嫌ふきげんに言つた。

「たべない。」

私は憂鬱ゆううつになつた。どうしてこんなことをする父であろう。残つたものなんか、さつさとやっつけてしまえばよいのに。私は横町の家へ帰つてからも、つまらなかつた。

家からその印刷所へ行くまでの十五分ばかりの道に、そこには活動写真《映画》などもあるのだが、五日おきに縁日えんいちがたつた。ちようど、お弁当を持って行く日が縁日であつたことがある。縁日には、近所の子供たちが申し合わせたように、二銭ずつもらうのが例であつた。私も、昼間のお小遣こづかいをもらわなにかわりに二銭ずつもらった。その日はお弁当を持ってそこへくるまで、縁日を忘れていた。無論、昼間の分はつかつた私は、はつとした。母はもう一銭しかくれない。皆みなが二銭ずつ持っているのに、自分には一銭しかないということが、どんなに寂さびしいことであらう。

「父にねだってみよう。」

道を歩きながら私は考えた。それはかなり言いにくい望みの無いことだつた。父はけちんぼだつたから。包みからお弁当を出して、もじもじしていたが、思い切つて言つてみた。父はがま口から二銭銅貨を出して、私の手の平へのせてくれた。あの大きな重い二銭銅貨を。(こんなことのあつたせいであらうか、今でもあの不便な二銭銅貨は、ひと昔とでもいったような懐なつかしい重みを持つているように感じられる)

開

そうして、その夜は大尽《大金持ち》にでもなった気で縁日を歩き回った。

父は小心な、曲がったことのできない（しかし道で拾ったぼつちりの金ならば、そっとしまっておくよ）うな）ほんとうの小人《器量の小さい人》であった。不孝者の私は父を吝嗇《けちな人》と思っていた。しかし、父はそれより仕方なかったのだ。父は咳が出た。それには長い間葉がいった。それに、私たちのような暮らしをしている者には、明日の保証が一寸もないのだ。ことに父のような病弱な人にはその感じが強かったであろう。

「もし明日にでもどうかしたら……。」

何事に対してもまず父の頭へはそうした言葉がひらめいたであろう。父は少しずつ、少しずつ、恥ずかしいほど少しずつ貯蓄をした。

類のこけた、ひげをはやした顔、そうして自分で染め直した外套《オーバー》を着て、そろそろ、そろそろ、下駄を引きずるようにして歩いてくる父の影が、私の心へよみがえる。それは、もうかなり病が重くなつてからの姿だ。父はいよいよ動けないという日まで勤めた。

虎ちゃんという、いつも頓狂な《いきなりおかしい》ことを言つて笑わせる私の友だちの八百屋の子は、私たちの仲間で突然こんなことを言ったことがある。

「たつちゃんとお父さん偉いんだってさあ！」

「なぜ？」

仲間たちの顔と顔を見比べる虎ちゃんの悪戯な顔を、私は薄気味悪く、そして間が悪るげに見つめる。

「だってひげをはやしているんだもん！」

そう言つて虎ちゃんは、げらげらと高笑いをする。

「ちえっ！ ひげをはやしているもんはどうして偉いの、えっ虎ちゃん。」

私は激しい恥辱を感じて突つかかつていく。すると他の仲間が、とぼけたことを言う。

「あたいひげをはやした電車の運転手を見たことがあるよ。」

そう言う私たちの、子供らしい皮肉のまじつた会話は、私の父が大儀そうに社から帰ってきて、私たちや仲間のそばを通つていった跡の、夕暮れの中で交されたような気がする……。

2 しかし、あまり父のことを語りすぎた。

その明治何年かの四月一日の夜、私たち一家は御膳をとり囲んでいた。話題は私の初登校のことであつたろう。父は時々酒を飲んだ。その夜も一本の酒が父を上機嫌にしていた。「御屋敷の御婆さん」と母たちに呼ばれている、昔御殿女中《江戸時代、宮中・将軍家・大名などにつかえた女性をしていた養母に育てられた父は、酔うとよけいに切口上《かた苦しく改まった言い方》になった。私は私が一家の内で大変幸福者であることや、したがって一生懸命に勉強しなければならないこと、皆の恩を忘れてはいけないことなどを、説き聞かされて涙ぐみながら御飯をたべた。私たちの前にはひっそりしたおかしさがある。こうした父の説教は一度や二度のことではなかった。私はそれが大嫌いであつた。自分だけがうんと重荷を負わせられているような気がしてたまらなく憂鬱になる。泣き虫の私の眼からあふれる涙は貧乏に生まれついたのを怨めしく思う涙で、決して、病氣と戦い、生活と戦う父や、一年中手の平のざらざらしている母や、小さな時から工場や会社へ勤めつづけてきた兄たちへの、感謝の涙ではなかったのだ。

母は、一同の食事の終わるころに、私が明日から学校へ着て行く普段着が、あまりに汚れていることを思い出した。そして、次兄の古いかすりがあるが、あれではあまりひどいと思うとつけ加えた。母はそれを縫い直してくれようかと言うのだ。父はその紺がすりを見た。それは大分色が落ちていた。父はそれを

成 A3 国 語

開

染めてやるという。母は危^{あや}ぶんだ。紺がすりを丸染めにしては、変なものになってしまふからだ。しかし父は受け合った。

「子供の着るものなんか、さっぱりしていいすればなんでもいいんだ。あした少し早く帰ってきて俺^{おれ}が釜^{かま}で染めてやる。」

父には、自分のやけた外套を染め直した経験があった。

狭い台所は、釜から登る湯気で白かった。たすきをかけた父が、湯気の中で動いている。引き窓を見上げると星がもう光っている。

釜の下では薪^{まき}がぼうぼう燃えている。釜の中には黒い布と黒い湯とがにえたぎっている。父の手首も黒い。(父は一生懸命になると、よく鼻汁^{じゅう}がひげを伝った。自分の眼鏡^{めがね}の蝶^{ちょう}つがいを外して、細工をした時などの様子が眼についている)

さて、翌日のことだ。綺麗^{きれい}好きの母が、あれほどよく洗った釜で炊^たいた、その御飯はうす黒かった。
3 うす黒い御飯から、もうもうと湯気が上がった。

「赤の御飯のかわりだね。」

だれかがそんなことを言う。染められた紺がすりは、まだ乾^{かわ}ききらずに竿^{さお}にかかっていた。

幾^{いくにち}日かの後、② 私はその染め直した妙^{みょう}な紺がすりを着て、一年生の仲間に入っていたことであろう。私も、「前途^{ぜんと}有望な少年」であつたのだ！

(永井龍男「黒い御飯」による)

問一 ☆の部分からは、「私」が家族の中でどのような存在であつたことが読み取れますか。そのことを言い表した部分を本文中の――2の後からさがし、一〇～二〇字で抜き出しなさい。

問二 ――1「子供らしい皮肉のまじった会話」とありますが、子供たちの会話のどのような点を「皮肉」と言っているのですか。四〇字以内で説明しなさい。

問三 ――2「しかし、あまり父のことを語りすぎた」とありますが、どのような気持ちから「語りすぎた」のでしょうか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 強くひたむきに生きた父を尊敬する気持ち。

イ 自分のみじめな境遇^{きょうぐう}に対するうらめしい思い。

ウ 嫌^{いや}な思い出が次々によみがえる不快な気持ち。

エ 苦労した父の本当の姿に対する切々とした思い。

オ 父がけちであわれであることに反発する気持ち。

問四 ――3「うす黒い御飯」を、今の「私」はどのような思い出として感じていますか。「黒い御飯」が題名になっていることもあわせて考え、四〇字以内で説明しなさい。

問五 ――①「きつとその日はよい天気であつたらう」、――②「私はその染め直した妙な紺がすりを着て、一年生の仲間に入っていたことであろう」とありますが、自分の経験なのにこのように言うのはなぜでしょうか。その理由を「前途有望な少年」という言葉を用いて五〇字以内で説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

「その顔、どうしたんですか？」

ぼくは突然、顔のことを質問されることがあります。交差点で信号待ちをしているとき、横にたっている人から急に質問されて戸惑ってしまったことが何度もあります。

どれくらいの頻度で質問されるかはわかりません。どんな人が質問をしてくるのかもわかりません。だから質問される側は、ドキッとします。不意打ちの質問にドキッとするのは、

顔のアザを気にして、そのことにビクビクしている人は、他人からの視線、言葉をいつも気にしています。ですから、自分の顔を軽蔑するような視線、態度に対する用心は怠っていません。警戒心のある時は、心の準備ができていますから、「その顔、どうしたんですか？」という無神経な質問が来ても、うろたえることなく、対応することができます。でも、そういうふうに関わりを警戒している気持ちをずっと持ち続けることはできないのです。

体の調子が悪いとき、受験勉強で睡眠不足のとき、友達と楽しい会話をしているとき、そんなときは、警戒心が落ちていきます。そういうときは、周りの人がどんなふうに関わりを見ているのか観察する力がなくなっているのです。そんなときに、「その顔、どうしたんですか？」と質問されると、ものすごくびっくりすることになります。

たとえばこんな不意打ちをくらった経験があります。

友人に誘われてホームパーティに行ったときのことです。一〇人くらいの友人、知人が集まって、お互いの顔が見えるように、丸く座りました。お互いに知らない人もいるから自己紹介をしようということになりました。順番に自己紹介をして、ぼくの番が回ってきました。

「フリーライターの石井です。よろしく」と話すと、ぼくの正面に座った二〇歳くらいの青年が突然、「その顔、どうしたんですか？」

と聞いてきたのです。ぼくはその青年とは初対面でした。

自己紹介の和やかな空気が一変しました。¹この質問で雰囲気さがらりと変わり、みんなから笑顔が消えました。ぼくのことをよく知っている人は、その質問を聞いて、申し訳なさそうな顔をしています。

ぼくはこの不意打ちに怒りました。でも、まだパーティは始まったばかりです。このパーティのためにぼくの友人は腕をふるって手料理をつくっていました。その手伝いをぼくはしました。そうやって時間をかけた、心のこもったパーティの雰囲気、ぼくが怒ることで壊してはいけません。そう思いました。

「生まれつきのアザですけれど……」

青年は、

「あ、そうですか」

とつぶやくと、彼は何事もなかったかのように、隣の人と談笑を始めました。

「じゃあ、次の人、自己紹介をお願いします」

このホームパーティの中心人物は和やかな雰囲気を保とうとしていました。ぼくは怒りを抑えてグラスに注がれたビールを少しだけ舐めました。ビールの苦みが口の中を満たしていきます。ぼくはその青年の不意打ちを予測できなかったことを悔やみました。友人と一緒に手料理をつくっているうちに、どんなときでも解かなかった周りへの警戒心がゆるんだのです。そのゆるんだ心の隙に、二〇歳の青年が質問する

開

① ヨチをつくってしまった。この青年は、ぼくの顔の赤いアザをみて、単純に「どうしたんだろう」と思ったのでしよう。深い理由などなかったのだでしよう。だから「生まれつきのアザですけれど……」というぼくの答えを聞いただけで「あ、そうですか」という反応をしたと思うのです。本当にぼくのアザに興味があれば、その自己紹介の後にぼくに個人的に話しかけてくるはずです。もしそうしなければ、ぼくは青年の「ちよつとした好奇心」を満足させるための人間になってしまします。

「言った側には悪意はないのかもしれないけれど、そんなことを言われたらつらいからやめてほしい」

2 そんな経験あるよね？ 言われて傷ついた経験はよく覚えていけるけれど、その逆はどうだろうか。気楽に言った言葉によって、目の前にいる友人がみるうちに怒り出したり、泣き出したりしたこと。

ぼくはその青年の言葉を聞いても冷静なふりができた。そのとき、ぼくは二十代②ナカバの大人だったから。

その青年は自己紹介のあと、ぼくに話しかけてきませんでした。初対面の人に対して顔のアザの理由を質問するのはなぜだろうか？ ぼくは考えこみました。もう数えきれないほど同じことを考えています。それでも考えてしまうのです。

この青年が礼儀^{れいぎ}しらずだったからだ、と断定してしまうのは簡単です。でも、そうやってその青年のことを忘れたとしても、また別の場面で、必ず「同じようなことを言う別の人物」と出会ってしまうのです。だから、ぼくはその青年というぼくにとつての「他者」の気持ちを想像します。想像することで見えてくることがあります。そしてその青年は「ぼくという他者」を理解しようとする想像力がとばしいのです。だからといって、その青年を③セメはしません。ぼくの心が疲れきってしまうからです。顔にアザやキズのある人の中には、質問されれば④セイジツに答えるようにしている、という人もいます。

でも、それでは質問に答え続けることになるような気がして、ぼくは耐え^たられない。友人になって、親しくなったあとに話ができることだと思うのです。

（石井政之『人はあなたの顔をどう見ているか』（筑摩書房）による）

問一 —— 1 「この質問で雰囲気さがらりと変わり、みんなから笑顔が消えました」とありますが、このような質問をしないためにはどうすることが必要だとこの文章では述べていますか。三〇字以内で答えなさい。

問二 —— 2 について、あなたにも「言葉によって傷ついた経験、傷つけた経験、あるいは、だれかの言葉によって傷つく友だちを見た経験」があるのではないでしようか。そのときのことを思い出して書いてください。

① 経験したことを、その様子がよくわかるように一〇〇字以内で書きなさい。

② そのことについて、この文章を読んだ今どう感じていますか。五〇字以内で書きなさい。

問三 —— ①～④のカタカナを漢字にしなさい。一画ずついいねいに書くこと。